

## 論文審査の結果の要旨

氏名：渡 邊 桜

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：保育実践上の「葛藤」の主体的変容に関する臨床教育学的研究

審査委員：（主査） 教授 小笠原 喜 康

（副査） 教授 羽 田 積 男

東京学芸大学名誉教授 小 川 博 久

聖心女子大学教授 河 邊 貴 子

本論文は、集団と個を同時に保育しなくてはならないという保育実践上の「葛藤」を人・物・場の相互関係＝関係論として捉えることにより、保育課題の具体的解決が促されることを明らかにしようとするものである。

これまで、保育実践研究の葛藤問題は、保育者個々の心理の問題＝心理主義的に捉えられ、解釈されてきた。したがって、「保育者の感性を磨いて」「子どもの内面に寄り添う」という精神論によって曖昧にされてきており、具体的にどのような環境や援助であれば、「子どもの内面に寄り添う」ことが可能になるのかは、明確に議論されていない現状があった。つまり、保育実践の当事者である保育者が、明日からの保育で具体的にどのような環境や援助をしていけばよいのかわからないということが少なくない。しかし、保育実践上の葛藤は、人・物・場の相互関係性の問題、つまり、関係論としての「葛藤」ととらえるならば、そうした相互関係を調整することで乗り越える可能性がでてくる。

本論文は、こうした新しい視点を、今津(2011)の介入参画法に依拠し、エスノグラフィーにより仮説生成を行うことで具体的に明らかにしようとしている。介入参画法とは、「個人や人々ないし集団あるいは組織に対して、さまざまな役割をもつ介入的实践(intervener)が問題解決のために変化を生じさせるはたらきかけを指すものであり、本研究に照合すれば、この介入的实践者が研究者となる。そこで本論文では、研究者が保育者実践者の「葛藤」に寄り添い、その質的段階に応じた「葛藤」や保育課題の具体的解決策を保育者と共に見出すという協働関係に基づいた参画をおこなうことで、それを乗り越えることができることを明らかにしている。

本論文は、こうしたようにこれまでの個人的心理の問題としがちであった「葛藤」を新たな視点で捉え直して、より具体的な方策を打ち立てている。これは、これまでの幼児教育研究に全くみられなかった、新しい理論であると評価できる。

以上により、本研究は、博士（教育学）の学位を授与するに価すると認められる。

以 上

平成27年5月21日